

クリスティーヌ・ド・ピザンと「ばら物語論争」

Christine de Pisan et "le querelle du Roman de la Rose"

木間瀬精三

西欧世界で十三世紀の前半が封建社会の完成期・騎士文化の絶頂期であるとすれば、十三世紀の後半はすでにその崩壊の兆を示すに至った。すべての生活面においてそうである如く、騎士道精神においてもその変遷は著しく認められる。それを最もはっきりと示すのは「ばら物語」Le Roman de la Rose の成立史であろう。ペトラルカがフランス精神界が生んだ最も卓越した詩と呼び、十四世紀以降これ程よく読まれ、よく書き写され、又これ程大きな影響を——決して好いとはいえない影響を——及ぼしたもののないこの書は、実は二つの別個の、本質的に異なる二人の詩人の作品からできあがっている。即ち一二二五年から一二四〇年の間にギョーム・ド・ロリス Guillaume de Lorris の筆で四〇五八行が書かれ、その後一二七五年から一二八〇年ごろまでの間にジャン・ド・マン Jean de Meung が約一万八千行からなる続篇を書き足した。前篇・後篇といいながらしかし、素材を共通にするだけで、その雰囲気も思想も何等共通なものを持たず、むしろ両極端をあらわすといえよう。ジャン・ド・マンの「長い書き足しは、連続という外観を呈するよりは、むしろその否定であるとの感じが深い。彼は先輩者の高名な詞の中に、自己のいわんとするものを入れる容器を認めたに過ぎぬのではなからうか。」⁽¹⁾

(1) ベディエ・アザール共編「フランス文学史」第二巻・一一三ページ

ギョーム・ド・ロリスの物語は、「愛人」が「ばら」をつむという目的を達しないうちに終っているものの、ただそれ故に未完であるとは考えられず、彼の上品な宮廷趣味からすれば、そう終る方が当然なのかも知れない。⁽²⁾しかしジャン・ド・マンはあえてこれを未完成と見なして、たとえよし未完の詩であるとしても、それを終結にまで導くには精々で数十行で足りるであろうものに、長々といつ終るともない詩をつけ加えたのであった。

(2) 同上、一二二ページ

ギョーム・ド・ロリスがトルヴァドゥールの後裔であり、どこまでも騎士社会の人々を楽しませる宮廷詩人であるとするば、ジャン・ド・マンは哲学者であり、人々を教え導き、その眼を開こうとする啓蒙家である。前篇は寓意文学 *La lettre rature allegorique* の結晶として、細念に構成された筋の運びも見事であるが、後篇では単に種々の——自然・芸術から政治・道徳、更にまた恋愛や結婚等の——ありとあらゆる問題に関する論議を展開するための場面を提供するだけのものとして非常に煩雑なものとなり、その無意味な筋を一八〇〇行にわたって追っているのである。従って後篇の興味は、もっぱらそこに示される博学的議論を拝聴することに尽きる。ジャン・ド・マンはまさに百科全書の知識の所有者である。しかも決して浅薄な知識ではない、なみ／＼ならぬ深い学識をもつ事は、彼の手になる多方面にわたる翻譯書の数々でも察せられる。特に古代に関する彼の智識は、この時代としてはずば抜けたものであり、ローマの詩人達をそれぞれその特色において模倣している等、古代文学に対する理解の深さは比類のないものである。「ジャン・ド・マンは、まことに人文主義者の最初の人であった」⁽³⁾という言葉は、当を得ているといえるであろう。

(3) A. Jeanroy: *Histoire des lettres dans l'Histoire de la Nation Française de Hanotaux*, t. XII (Paris 1921, p. 414.

彼の思想の根柢に横たわるものはアリストテレスの哲学である。その点、彼はトマス・スコラ哲学と多くの共通の要

素を持ち、また彼の用語はスコラ哲学の用語をそのままフランス語の形にして用いたものが多く、スコラ的意味においてでなければ、正しくは理解され難いものである。⁽⁴⁾

- (4) 「ばら物語」エッセイ哲学と6間の用語の連関性について G. Paré: *Le Roman de la Rose et la scolastique courtoise* (Paris-Ottawa 1941) p. 23 ff. を見られた。

彼はトマスと同様、主知主義者、理性論者であった。当時流行となってきた占星術や宿命論を論駁して、運命をば「理性がよく変え得るもの *Raison l'en peut bien destourner* (Roman de la Rose 17070) と呼び、また人は「されど理性に逆らうては力なきもの」*Mais l'ont poeir contre Raison* (同) と説くとき、同じく天体の運行の人間の運命を支配することを否定し、⁽⁵⁾「理性の *Anima rationalis* 働く所、いかなる必然性 *necessitas* の支配をも認めない聖トマスと共通した精神を示す。

- (5) S. Thomas, *Comment. in Metaphysicum Aristotelis*, lib VI, lect. 3 (ed. Cathala, Torino 1925, p. 366).

しかし彼の本質は自由な精神にあり、彼の批判はいかなるものによっても制約されることはなかった。彼の理性は大胆にもすべてのものに批判の眼を向けるアリストテレース的民主主義をふりかざして、王制の起原も貴族制もすけくと批判・分析し、「血統の高貴さは価値ある高貴なでなう」*Gentillece de lignage n'est pas gentillece que valle* というには、彼の時代には相当の勇氣を必要としたことであつた。

彼にとって絶対なものは自然であり、自然の法則であつた。彼の徹底した自然主義は、アリストテレース哲学の忠実な遵奉からくるものであることはいうまでもない。プラトニズムに代つて中世精神界を支配したアリストテレース主義は、それが聖トマスの如き天才によって完全に消化され、その牙を抜き去られて、キリスト教的思想体系の礎石として利用さ

れるのではない限り、やはりその唯物論的本質の危険性を失っていないことを証明する事柄なのである。ジャン・ド・マンの世界では、人間は神の摂理の下にあってどこまでも自由であり、自己の生涯を決定し、また周囲の世界を支配して自己の意志に従わせる。人間の道徳とは、自然の法則に従うこと以外の何物でもなく、その中にあって人格の發展が見出される。

宇宙は、その機構もその運動も規定されたものであるが、その宇宙の中心に在るのが自律性をもった自由なる人間である。森羅万象すべて自然の中なる法則に忠実に服従せざるはない。天体も諸元素も、(Roman de la Rose, 18967)、植物も、(18981) 鳥や魚も (18991)、すべての獣も (18999)。ただ人間のみが自然に逆らって行動し、「豊饒の法則」に従うことを拒む (19201)。人間の罪と悪はそこに在ると、ジャン・ド・マンは強調する。

そこには殆んど素朴ともいふべき自然及び理性への絶対な信頼、いな信仰が見られる。自然の中に神の足跡、創造主の鏡をしか見ず、万物の根元にはいとも高き神の神祕的真理——三位一体・贖罪・教会の理念等——がひそみ、自然とはその超自然的真理のシムボライズされた表現に過ぎないとした、中世前期の教父達の自然観と、何という甚だしい対比を示していることが。

こうした自然主義的精神が最もはっきりと表面にあらわれているのが恋愛に関する論議であることは、「ばら物語」そのものが恋愛文学である以上、当然のことであろう。

そしてここにおいてほど、ギョーム・ド・ロリスとジャン・ド・マンの世界が両極端の対比となつてあらわれている点はない。トルヴァドール以来いよ／＼精神的になつてきたクルトアジー Courtoise の愛の教義は、元来は官能愛から出発したものが、その官能性を完全に脱皮し、肉から離れた完全に純粹な愛を要求する。

Toutes fames serif et eneur

En eus servir poine et labeur (v. 2125 ff.)

すべての女性につかえ、うやまつ

その奉仕に苦勞して働く

ことをジャンドローリスは愛の神に命令させている。騎士道愛の法則によれば、高貴な愛もって婦人に仕えるものは、その愛によって徳高く、心の純潔になるものである。そして気高い女性はその肉体的存在から崇拜すべき靈的存在にまで高められる。愛はここにおいて自然界から超自然の世界へと飛躍する。

自然主義者ジャンドローマンにとっては、そうした理想化された女性像は、何と笑止千万なものであらう。女性とは崇拜の対象ではなくして欲望の対象であり、恋愛とは種族保存の本能以外の何物でもないことを彼は説く。

Il est vérités sans doutance : Fane n'a point de Conscience, vers quanqu'el het, vers quanqu'el ame
(v. 10165 ff.)

これは疑いない真理でござる。女は憎むものや、愛するものに対しては、良心の一かけもござらぬ。

と女は信ずべからざるものと極めつけ

Qu'onques ne trova fane juste

正しい女などとは、見たこともない。

と嘲笑する。結婚した女は籠にいれられた小鳥 (v. 13941) 容器のなかの魚 (v. 13979) であって、あらゆる手段をもって身の自由を回復しようとする (v. 13959—13967)。それは自然のさせる業であって、結婚の束縛は自然に反すること

あるからである。人々が法律も従属関係もなく、自由にたがいに愛し得た古い時代の過ぎ去ったことは惜むべきであり
(v. 9493 ff.)

Toutes por tous et toutes por toutes,

Chascune por chascun commune.

E chascun commun por chascune ! (v. 14833 ff.)

どの女もみな、どの男のものでもあり、どの男もみな、どの女のものでもある

状態を最も自然な最も理想的状態と考える。種族保存の法則は道德律より優位に立つものであるからである。「自然」の忠実な弟子として「愛人」に來援して、塔にとじこめられた「ばら」を救いだす「ヂェニウス」Geniusこそ、この本能のシムボライズされた姿である。かかる見地よりすれば、キリスト教的な禁欲や貞潔は自然の法則に背く最も不自然なものであり、善かつ義なる神がその状態にある人々を選ばれたる人々とし、他の人々をば完全性において劣るものとなすとは、全く不可思議千万なことであると論ずる。(v. 19599 ff.)

こうした貞潔に対する非難に対しては、聖トマスは既に一二五七年 Summa contra Gentiles 第三卷 136—137章⁽⁶⁾で論駁しており、一二七七年にパリで司教タムピエ Templier が (1) 禁欲は本質的には徳ではないとなすこと、(2) 肉的行为を完全に節制することは道德を腐敗せしめ、種族を滅ぼすとなすこと、(3) 単なる私通、即ち独身者同志の關係は罪にあらずとなすこと、等の説を邪説なりとして禁じていることも、ジャンド・ド・マン流のアリストテレス・否むしろオヴィデウス Ovidius ユヴェナリウス Juvenalis に流れを發する異教的自然主義、快樂主義が當時行われていたことを物語るものであらう。

(6) ed. Leonine t. XIV. pp. 412-413.

(7) *Paré: op. cit.* p. 164.

ジャン＝ド＝マンはこの点からして必然的に修道生活を否定することとなる。もっとも彼はそれを公然といい表わす事は避けて、もっぱら托鉢修道会に攻撃を集中し、偽善者とのしるのである。

L'autre, qui par veu s'unelle,

Prent un mantel d'hypocrisie,

Don en fuitant son penser cueuvre,

Tant qu'il pere dehors par euvre. (v. 15839 ff.)

自らを卑しくするとの誓願を立てて、偽善のころもをまとうもう一人は、それで自分の考えを被い隠すふりで、一方外では隙間から本当の姿を見せている

貞潔は自然のおきてに反し、服従は自然の自由に背き、清貧は罪惡の根源であるときめつける。Dame "Contrainte Abstinance" (「強いられた節欲」なる貴婦人) をして語らしめる個所 (v. 12155 ff.) も、托鉢修道会に対する攻撃なのであろう。

ジャン＝ド＝マンは決して恋愛をいなんたり、女性奉仕を拒むものではない。ただその内容が違ってきただけのことである。超自然的要素にまで高められた女性に対する愛と崇拜と奉仕も再び地上の世界に落ち、何等の目的も持たず、その報酬を求めることもなく、それ自体において充足的価値ある女性に捧げられた愛の奉仕も、ばらによって象徴される処女の淨らかな美を我が物にする手段としての手練・手管に他ならないものに堕してしまっているのである。

理論的には「ばら物語」は宮廷風な、高貴なものであることに変わりなかった。

人生の喜びの庭園にはただ選ばれた人達のみが愛によって入る事ができるだけである。この庭園に踏み入ろうとするものは、憎しみ、不誠実、卑しき、物欲、食欲、妬み、老年、偽善等を知らない人間でなくてはならない。しかしながら、これらと対比して数え上げられる積極的な徳の数々は、この理想がもはや宮廷的恋愛における如く倫理的なものでなく、純粹に貴族的なものである事を証明している。即ち、無碍愛、楽しみ得る心、快活、愛、美、富、寛容、心の自由と礼儀深さ。これらはもはや、愛人から光を受けてその人自身が光り輝き、高貴なものとなるというのではなくて、愛人を獲得せんための有効な手段なのである。この作品の中核は、もはや女性崇拜——たとえよいつわりのそれであろうとも——ではなく、少くとも第二の作者ジャンクロピネル（ドーマン）にあっては、女性の弱さの嘲笑的輕蔑がこれにとって代っている。この輕蔑は、こうした恋愛の官能的性格に端を発するものである。⁽⁸⁾
とホイジンガは論じている。

(8) Huizinga, *Herbst des Mittelalters* (Deutsche Übersetzung von Wolf-Mönckeberg, Stuttgart 1938) S. 163.

騎士道愛の時代は過ぎ去った。いな、騎士社会そのものが過去のものになっていったのである。十字軍の失敗とともに西欧社会全体をとらえていた宗教情熱の波がひいていく時、女性に純粹な愛と宗教的熱情を捧げ、それへの奉仕に騎士の本領を見出す高貴な恋愛論者のあり得るはずもない。かかる精神は、最後になおダントにおいて遅咲きの、しかし最も完成された形式の花を咲かせた後、西欧精神から消え去っていった。しかし内容はなくとも、形式だけは残り得る。かくしてクルトアジは一つの社交の形式となった。中世末期の宮廷生活を美しく彩る恋愛遊戲！しかし遊戲にはルールを厳守することが必要である。遊戲を楽しく社交生活を美しいものにするためには、ルールはいよく厳しく、高貴な精神の

ものでなくてはならない。こうしてクルトアジーをば一つの動かすべからざる厳しい形式に固定する必要が起つてきた訳であつた。このルールを覚え込み、形式に馴れるための教材として「ばら物語」は中世後期の貴族生活に大きな役割を演じたものであつた。

ジャン・ド・マンは時代にいささか先んじ過ぎていた人物の様に思われる。同時代の人々は彼の述べる所の真意を理解し得なかつたのではなからうか。この民主主義者、自由主義者が貴族階級の間にかくも迎えられ、かかる名声を得たという事は、さもなければ理解に苦しむ事である。彼の賞讃を受けたのは、解りやすい言葉、健康で力強い、しかも卑俗に流れない描写を持つ詩人としてであつたのであらう。しかし彼の背德的倫理を非難する声も勿論あつた。イギリスの道德家ジョン・ガフー John Gower の *Mirour de l'homme*「人間の鏡」(一三二七年)やギヨーム・ド・ギュブヌス Guillaume de Deguilleville の三部作 *Pèlerinage de la humaine de l'ame et de Jesus Christ*「人生、靈魂、及びイエズス・キリストの巡礼」等がその例であるが、その声を打ち消すばかりのジャン・ド・マンの追従者の賞讃のどよめきの方が強く響いた。そして「ばら物語」の悪しき例にならつて女性に向つて悪口雑言の矢を放つブローニュー・シュール・メール Boulogne-sur-Mer 出身の學者マニユ Mahieu の“*Lamentations*”(悲歌)の如きがあつた。この書をフランス語に訳してひろく一般に普及せしめたジャン・ル・フェヴル Jean Le Fèvre が後になつてこれを悔いて、“*Livre de Lésée*”(喜びの書)のなかで、

De femmes sommes tous venys,
Autant les gros que les menus.

Pourquoy celluy qui en dit blasma

Doit estre réputé infâme.

女から男はみんな生れたもの、

高きも低きも同じこと。

それゆえ女を難ずるものは、

不名誉な名を立てられるべきだ。⁽⁹⁾

(6) O. Cartellieri, Am Hofe der Herzöge von Burgund. (Basel 1926) S. 105.

と叫ぼうとも、一旦蒔かれた種から生えた毒樹は茂る一方であった。

マユウは不幸な結婚生活が烈しい婦人憎悪者にした人であり、胸中の悶々の情を粗野な女性侮蔑の言葉に晴らそうとする。神ですら女をよしと見給わず、天国に女がいないのもふしぎはなく、アダンエヴァを作るもとなつたあの肋骨を最後の審判の後に返してもらおうという。

そは(女は)すべての不幸の源

悪しき事も憤怒もすべて

ここより起る

そしてまた、

女のかんばせにはよき事少しもなし、

その前に破壊と滅びあり。

自分の悪妻の所業を憶い出して

女はバシリスクに似たるもの⁽¹⁰⁾

その蛇から神は汝を護り給えー

人々はその視線によって死す。

(10) バシリスクとは中世の想像の生んだ怪物で、牝鶏の頭と八本の脚を持ち頭に冠をいただいた毒蛇の王。

かくも引き下げられた女性の品位は、更に他の方面から著るしくおびやかされることとなった。ユダヤ教からの伝統として初代キリスト教の女性観は、決して女性の名に名譽を添えるものではなかった。女性のうちに男性を大罪におとしめる誘惑者を見て、これに触れない事をすすめ、あるいは男性より劣ったものとして、それへの絶対な服従を要求する態度は、女性蔑視を促進しなかったとはいいい切れないものがある。この態度は女性崇拜の高潮期であった十二・三世紀にすら、教会生活の底流として存するものである。教皇インノセント三世の *De Contemptu Mundi* (蔑世論) の有名な句を引用すれば

Concipit mulier cum immunditia et fetore, Parit cum tristitia et dolore, nutrit cum angustia et labore, custodit cum instantia et timore.

女は不潔と汚物を以てみごもり、悲哀と苦痛とともに子を生み、窮乏と努力もて乳をのませ、

不安と恐れもて番をする⁽¹¹⁾

(11) Migne: P. L. t. CCXVII. p. 702

母性の尊とさとその幸福の如きは、この世俗輕蔑者の眼には一顧の値いすらないものである。

この書は十二世紀末の当時よりも、むしろ中世末期に至ってひろく読まれたもの⁽¹²⁾である。十四世紀中期以来の黒死病の絶えずくりかえされる大流行によって、人々は死の足音を常に自身の背後に聞き、地上の世界の果敢なさを日々その身に思い知らざるを得なくなった。⁽¹³⁾ “Une fois sur toute femme belle, mais par la Mort suis devenue telle” (かつてはすべての女性にまさりて美しかりし我が身も、死によりてかくなりぬ⁽¹³⁾)と腐りかけた死体は警告する。インノセント三世の言葉は、こうした悲惨な現実を直視する人々の心に強く喰い入ったことであろう。女性美の果敢なさを知ることとは、そこに価値を見てそれを追求することの愚かしさを教え、ひいては女性そのものの価値を下落させることとなつた。まことに男性中心の利己的な考え方であるが。

(12) Huizinga : a. a. O. S. 198.

(13) Oeuvres du Roi René, ed. Quatrehardes, I, p. CI. (Huizinga, a. a. O. S. 194)

いづれにせよ、女性悲哀にもジャンドマンとインノセント三世のはさみ撃ちにあつて、その名譽は踏みにじられ、あらゆる侮辱にさらされ、「尊敬に値いする女などというものは、黒い白鳥の様にまことに珍らしい鳥で、たやすく見分けがつく。」という様な嘲笑を堪え忍ばなければならなかつた。

余りにも時代に先んじたジャンドマンが、真に人々に理解され、時代の指針となる時期は、百年戦争におけるフランスの敗戦によつてもたらされた。この戦争においてフランス騎士軍がイギリスの民兵に対して、余りにも戦力において劣つていたことは、騎士の時代がその高貴な騎士道とともに永久に過ぎ去つたものであることを人々に覺らしめた。騎士道

小説の夢を追い、そこに生活の基を見出すことを見出すことはや不可能であつた。その生活の基礎となるべきものを人々はジャン・ド・マンの中に見出したのであつた。「ばら物語」は「一種の市民的福音書」⁽¹⁴⁾となり、そのいかなる權威の前にもたじろがない理性主義の精神は、理智に目覚めかける人々の心を魅惑した。こうして「ばら物語」は十四世紀末から十五世紀にかけて始めてその大きな影響力を社会の上に及ぼし始めた。そしてその好ましからぬ結果も、特に道徳生活に關する面に被うべくもなく現われてきたのである。そして又そこにはイタリアから人文主義の最初の波が押寄せてきた事も考えねばならぬ。それは十三世紀の主知主義者ジャン・ド・マンを再評価させることになつたのであろう。

(14) ベディエ・アザール共編「フランス文学史」第二卷二九二ページ。

とにかくこの時代に至って始めて「ばら物語」は熱烈な礼讀者——特に人文主義者の間に——を見出した。と同時に又そこに含まれる背徳性に対しては以前に増した激しい攻撃者が現れ出たこともふしぎではないであらう。こうしてこの兩陣營は「ばら物語論争」*La Querelle du Roman de la Rose* という名を以て呼ばれている激しい論争に捲き込まれることとなつた。その口火を切つたのが、婦人の名譽に加えられる余りにも激しい侮辱に耐えかねて、敢然と女性侮辱者達に挑戦した女流詩人クリスティーヌ・ド・ピザン *Christine de Pisan* であつた。

クリスティーヌ・ド・ピザンはイタリアのボロニヤ市 *Bologna* の医師かつ天文学者であつたトムマゾ・ディ・ピザノ *Tommaso di Pisano* の娘として一三六四年ヴェネチア *Venezia* で生れたが、父がフランス王シャルル五世 *Charles V.* の侍医になつたので、四歳以後はバリで養育された。父は彼女にラテン語と自然科学を教え、優れて豊かな教養を身につけしめた。十五歳でピカルディー *Picardie* の貴族であり、国王の秘書官たるエティエンヌ・デュ・カステル *Etienne*

ne du Castel と結婚し、結婚生活は幸福であつた。

Douce chose est que mariage,

Je le puis bien par moy prouver.

結婚とは甘美なもの

私はそれを自分の身で証し得る。⁽¹⁵⁾

(15) Oeuvre poétiques. (éd. M. Roy) I. p. 237, No. 26.

しかしそれも十年後には夫の死を以て終りを告げ、父もまた死んで、三人の子供と共に Com turtre suis sans per, toute seulette 「小鳩の様に伴侶もなく、全くひとりぼっちに」残された。亡夫の遺産を手に入れる為の訴訟で財産を費い果した二十五歳の寡婦を待つものは、母と子供とを自分の腕で養っていくその苦勞であつた。

Hélas ! Où donc trouveront reconfort

Pouvres vestes de leur biens depouillées

あゝ！財産を奪われた哀れな女達は、一体どこにその慰めを見出すのであろうか？⁽¹⁶⁾

家族のために日々のパンを得なければならぬ必要は、彼女をして不本意ながら文筆に頼らざるを得せしめた。それが彼女の中に眠っていた詩人の天分を呼びさまし、これを伸ばす事となつたのであつた。

Hélas ! Quel infortune amere

Tombe sus à femme et quelle misère,

Quant pert mary bon et paisible,

Qui d'Amour l'amoit.

あゝ！愛をもて愛する

よき物静かな夫を失う時

女には何とにがい不幸と艱難が

身の上に落ちかかる事か！
(17)

(16) Cartellieri, op. cit. S. 107.

(17) Ibid. S. 107.

「舵取りを失った舟を操って波荒い海に乗出した」彼女は、文筆をもって生計を立てる最初の女性の一人である。そこでは彼女が父から受けた高い教養が役立ち、イタリアの血をうけたこの若い女性には、祖国の文学、特にダンテの「神曲」をフランスの教養社会に紹介し、普及せしめる上に、大きな功績を有した。詩人としての彼女は、「文筆の業と學問とによって男になってしまった。」という言葉にもかわらず、真に女らしい優しい心をもって唱い上げた数々の愛の詩は、今日でも読む人の心を動かさずにはおかぬものである。これ程純粹に女の心を歌った詩人は、いつの時代にあっても少ないのではなからうか。クリスティーナにあつては、すべてがいつも自然で、上品、優雅であつた。それは恐らく知性的な、しかも温く気高い心の人となりからくるものであつたろう。そしてそれ故に、宮廷においても、一般からも彼女は直ちに好意をもつて迎えられた。詩人としてのスタートは成功であつた。

しかし真に女らしい性格の彼女は、そうしたことよりも家庭で夫や子供の世話をして働く方を好んだであらう。家族を養つていく苦勞は彼女を疲れさせたに違ひない。いつの時代にもそうした境遇の婦人がそうある如くに！

Je chante par couverture,
Mais mieulx plourassent mi oeil,
Ne nul ne scet le travail
Que mon pouvre cuer endure.

ヴェールを通して歌えども

我が眼は涙することいよく多し、
哀れなる我が心の耐え忍ぶ

労苦を知る人もなし、

Pour ce muse ma doulour.

Qu'en nul je ne voy pitié,

Plus a l'en cause de plour,

Mains treuve l'en d'amistié.

我が悲しみをかくすのは

誰にも憐れみを見ざるため

涙の種はいやまし多く

友情を見出すこといよく少なし

Pour ce plainte ne murmurr

Ne fais de mon piteux duel;
 Airçois ris quant plourer vueil,
 Et sanz rime et sanz mesure
 Je chante par couverture.

その訴えをつぶやかざるため

わが哀れなる悲しみを歎く事なし。

涙せんとする時はむしろ笑ひ

リズムもなく、韻律もなく

ヴェールを通して我は歌う⁽¹⁸⁾

(18) ベディエ・アザール 前掲書、二三九ページ

時の慣習に従って彼女は詩集を豪華な写本に作らせて、国王、王妃、あるいはベリー公 Duc de Berry、ブルゴーニュ公 Duc de Bourgogne、オルレアン公 Duc d'Orléans 等に捧げ、宮廷は又この才能豊かな詩人に関心を示し、特にブルゴーニュのフィリップ豪胆公 Philippe le Hardi は彼女の保護者となり、彼の勧めで一四〇四年クリスティヌは Le livre des Faicts et bones meurs du Roi Charles 「シャルル王善行記」を書いた。彼女の父の君主であったシャルル五世に対して彼女は心からの尊敬を示している。

世界のすべての国民のうち、フランスほど善良で人情深い君主を持つ国はないと私は敢ていう。御世辞なしに。なぜならそれは本当の事であるから。

そしてその治めた国に対しても

あらゆるキリスト教国のうち、君主が残忍でなくて善良なことから、又その国の人々の礼儀正しく、親切なことからいっても、一般にいって一番住み心地のよい国であると私は思う。しかしそれは決してひいきでいっている訳ではない。私はこの国で生れたのではないのだから。⁽¹⁹⁾

(19) Cartellieri, op. cit. s. 107f.

と深い愛情を示し、全くこの第二の故郷に同化してしまっていることを示している。後年ブルゴーニュ家とオルレアン家の間に起った内紛が王国の基礎を危くし、その争乱が民衆を苦しめるようになると、クリスティーヌは鋭い警告の声をあげ、又百年戦争のフランスの危機に当ってジャンヌ・ダルク *Jeanne d'Arc* の出現するや、修道院の中から彼女を讃えたものがクリスティーヌの最後の詩になった(一四二九年七月三十一日)。生れながらのフランス人以上にフランスを愛する愛国の情熱であった。

しかしそれ以上に彼女が関心を寄せたのは従来 of 文学によって傷つけられた女性の名誉の擁護であった。それは女性にとって悪しき時代であった。女性に対する嘲笑、軽侮はともかくとして、女性自身にも十分それに値するものはあった。その最も悪い例を示すのが、フランスの王座にある女性であろうとは。

シャルル六世がバイエルン公女エリザベートと結婚したのは一三八五年のことであった。しかしイサボー *Isabeau* と呼ばれた若い王妃を待っていたのは失望のみであった。国王は間もなく精神病に陥り、その地位にふさわしい生活を送るには全く無能力な人間になってしまったからである。それは野心的な政治才能に恵まれた女性には恐らく国事に大きな役割を演ずる機会であつたろう。しかしイサボーにはその能力も意志もなく、又王妃にふさわしい威厳をもって哀れな状態

にある夫をとり、王子、王女達を養育する義務を果すこともできなかった。彼女は夫を恐れ嫌い、構いつける者もない国王は勝手な時に食べ眠り、身体を洗うことも、衣服をとりかえることもなく、最も憐れむべき状態にあった。子供達に對しても王妃は母性の愛情を注ぐこともなく、人民が日々のパンに窮していた時世に衣裳道楽に日を送り、日々の快樂を追うのに夢中であつた。その相手を勤めたのは王弟ルイ・Louisであつて、この二人の行状がどんなに人民の口の上につつたことか。ひそ／＼囁き交される噂も、次第に公然と声高くなり、あまりに向う見ずな男たちはその言動を己が命で償わなければならなかったが、しかし王妃は民衆の囁きには一向傾着する所がなかった。「変装して一度街を歩いて見るがよい。おん身について人々の噂することを耳にするであらう」とアウグスティヌス会の修士ジャック・ルグラン Jacques LeGrandはその説教で鋭い言葉を王妃に向けた。「おん身の宮廷ではヴィーナスが笏を振り廻し、泥酔と飽食がその随伴者である」⁽²⁰⁾

(20) Cartellieri: op. cit. S. 119.

一四三五年イサボーが孤独の中に死んだ後フランスの宮廷を支配したのは、またもや背徳の女性であつた事は何といふ不幸であらうか。フーケー Fouquet に画かれてその美しい姿を不朽に残すシャルル七世のメトレス、アグネス・ソレル Agnès Sorel は、その美と才氣をもって王の弱い心を完全にとりこにし、Damoiselle de beauté と呼ばれた。美貌の爲でもあり、王が彼女に与えたバリ近傍の采邑 Beauté の故でもある。この下層階級出身の美女の權勢は王妃を凌ぎ、敢て王妃を無視する傍若無人さであつた。この王宮の娼婦の恥知らずな服裝も行いも、少女達を虚榮と墮落の道に誘うよすがとならざるをえなかった。

こうした悪い模範が上にある以上、庶民がこれに倣わない筈はなかった。パリは快樂の町と呼ばれ、そこには三千の娼

婦が淫蕩な風俗を全市にまき散した。彼女等には区域制限や服装の規定等があったが、それを無視する遊び女達は貴婦人然たる服装で歩き廻り、すばらしい祈祷書を読めないながらも御供に持たせて聖堂に出入りし、上流階級の生活にも大きな役割を演じた。

上は宮廷の貴婦人から、下は市井の遊び女まで、同じ様な虚栄と快楽追求の生活を送る時代にあつては、男性が女性の中に肉の思いのみを見て、嘲笑・侮辱のままとしたのも、幾分かの道理があるであらう。

クリスティーヌ・ド・ピザンはいかにこれ等の同性の振舞を恥じたことであらう。男性の攻撃に対して女性を弁護するとともに、女性を教育し、忠告を与えようとする。その結果として生れたのが、散文で書かれた“*Cité des Dames*”（女の都）と“*Trésor de la cité des Dames*”（女の都の宝）別題“*Les livres des trois vertus*”（三徳の書）である。前者は一四〇四年に書かれ、多くの点でボッカチオの“*De claris mulieribus*”（名婦人伝）の翻譯とも見られ、男子に劣らぬ徳に秀でた婦人の例を、聖書、教父の書、異教古代の著作等のすべての「権威ある書」*Livres d'Autorité* に求めている。後者はクリスティーヌの全著作のなかで最も興味深く優れたもので、女性の義務を論じた「女性及び家庭教育の完全な講義録」⁽²¹⁾である。ここでは貴族のみならずあらゆる階級の婦人が、そしてまたあらゆる身分、あらゆる年齢の女性が論じられているので、当時の社会生活を知る上に非常に興味をそそる。彼女はフィリップ・ド・ノヴァル *Philippe de Novare* の輩が、読み書きは修道女だけが学ぶべきで、「読み書きする事で、女に多くの不幸が起つた」*Trop de mal advient aux femmes par la lecture et l'écriture* ⁽²²⁾ とするのを反駁し、女性も十分な知的教養を必要とすることは、男と同様だという。しかし又、穏やかで心優しく、女らしく気がつき、きちんと万事を始末し、御行儀がよいといった様な女のたし

なみの点も決して軽く見られていたのではない。平凡ながらも健全なキリスト教的家庭婦人の倫理がこに説かれている。クリスティーヌが理想とする貴族女性像とはどんなものであるかは、“*Prudence Mondaine*”（世智）が説く所からうかがえる。即ち、粗野で浮気な夫をも耐え忍び、いかなる誘惑にも負けず、自我を克服し尽して子供達のよき母、よき教育者であり、召使の厳格な、しかし公正な女主人であり、家政をきっちりやりくりし、万事を心得て夫の不在にはその權利を守り、万一の場合には勇敢に武力で居城をふせぎ得る如き女性である。⁽²³⁾

(22) Carlier: a. a. O. S. 110

(23) *Le Livre des trois vertus* (éd. Laigle, Paris 1912) p. 58ff.

男が女に服従を要求するのは認める。しかしながら、

Fay toy craindre à ta femme à point

Mais gard bien ne la battle point.

あなたの妻を正しく敬うようになさい。しかし少しでもたたいたりすることのないように、よく気をつけなさい
なぜならば

Ta femme soit dame de l'ostel après toi, non serve.

あなたの妻は、あなたについて家庭のあるじであるべきで、奴隸ではないのだから。⁽²⁴⁾

とは自分の息子をいましめている言葉である。

(24) *Les enseignements moraux, Oeuvres III. 41 Nr. 94. 91.*

クリスティーヌドールビザンは女性の教育者たるに止まらず、「ばら物語」を始め、多くの文学書によって傷つけられた

女性の名譽を弁護し、婦人の權利を主張することに激しい情熱を注いだ。一四〇一年 “L'Epistre au Dieu d'Amours (愛の神にあてた書簡) なる手紙の形式の詩で、彼女は憤然と女性に加えられた侮辱を叩きかえし、男の世界の虚偽と恥知らずを非難した。ジャン・ド・マンは虚妄の言を弄するとし、女性を男の生れそこねた不完全な存在として、精神的にも道德的にも劣ったものとする考え方を攻撃してやまなかった。マイユはどうかすれば神が女性をよみし給わないと主張し得るのか。救世主は一人の女に己れの母となる価値ありとなし給うたけれども、一人の男を父となし給う事はなかったではないかと。

クリスティーヌの言葉はしかし謙譲である。

一人の男性がすべての女性の例外なしに敢て侮辱し責める時、その優雅な著者に反駁し、その著書をつまらないものとする事を私のような女が敢てする事は、狂気、無作法、僭越に類するものと思われませんように！

彼女の批判は決して感情的なものではない。

私は「ばら物語」のあらゆる部分が悪いというのではない。なぜなら誤ちのない好いものも、好い言葉もあるのだから。そこにそれだけの大きな危険があるのです。⁽²⁵⁾

(25) Cartellier: a. a. O. S. 283, Ann. zu S. III.

彼女とても勿論かの高貴にして純潔な騎士道愛の時代は過ぎ去った事はよく知っていた。又それを惜むわけでもなかった。どんな恋愛の理想化でも、女性が天にも近く高められ、あがめられても、所詮は女にとっては有難くない男の仕業、男の全く自己中心的な考え方の表われである点、ジャン・ド・マンの世界と大差はない。結婚をそしり、女の弱点を並べ立て、女の不实と虚栄を非難するのも、やはり男の自己中心的な、利己心を被にかくさんとする手段に他ならないという。

「そんな本を作り上げたのは女ではなかったのですよ」と返事するだけだとクリスティーンはいう。⁽²⁶⁾ 所詮すべては女とかわりのない男どもの独り芝居、男の虚栄心の満足に過ぎないと主張する。

(26) L'Epistre au Dieu d'Amour. II, p. 14 (Huizinga, S. 191).

こうした彼女が、「オルレアンの処女」の英雄的行動の報せを、その修院における生涯の最後の時間になお耳にし得た事は、何たる喜び、何たる凱歌であつた事か！

Hé ! Quel honneur au féminin

Sex ! Que <Dieu> l'ayme il appert,

Quant tout ce grant peuple chenin

Par qui tout le règne est désert

Par femme est sours et reconvert

Ce que pas hommes fait n'eussent.

あゝ、何たる女性への名誉であろうか！「神」の女性を愛し給う事は明らかである。あの悪い偉い方々の御蔭で王国中がすべて荒れ果てた時、一人の女により生きくゝとよみがえった。これは男どものした事ではないのだ。⁽²⁷⁾ 騎士達がどんなに苦い顔でこの詩を読んだか、想像に難くない。

(27) Le Dit en l'honneur de Jeanne d'Arc. (Jules Quicherat; Le procès de Jeanne d'Arc. Vol. V. Paris 1849. 31. 15.)

彼女の哀れな境遇にある女性に注ぐ深い同情は、アザンクール Azincourt の戦い（一四一五年）に近親の多くが戦死し、あるいは英軍の捕虜となつたマリー＝ド＝ベリー Marie de Berry——シャルル五世王女——を慰めんために書かれた

Epistre de la prison de vie humaine (人生の牢獄よりの書簡) に滲み出ている。

更に又、一四一八年修院生活を送るようになってから書かれた、戦争によって不幸な境遇に陥ち入った婦人達の為の観想書で、御主の御苦しみを思つて、忍耐強くその苦惱に堪えるべきを勧めている。⁽²⁸⁾

(28) Schürer, Kirche und Kultur in Mittelalter, Bd. 3, S. 212.

女性として最も恥すべき生活を送る遊び女達に向つては、

すべての人々があなた達を深く軽蔑して、まともな人間ならば誰でも、あなた達を破門された人のように道を避け、又道であなただ達を見まいとして、目をそらせる。……立ち上りなさい。汚穢のなから抜け出しなさい。正業に立ち戻りなさい。⁽²⁹⁾

と叫びかけている。

(29) Le livre des trois Vertus (éd. Laigle, Paris 1912), p. 361ff.

いわば女性の代表として男性の横暴に挑戦するクリスティーン・ド・ピザンには風当たりが強かった。「ばら物語」の礼讃者の中から早速この攻撃に対する応戦者が名乗り出た。一方クリスティーンを支持する文書も現われて、ここに華々しい論争が始まった。

いわゆる「La querelle du Roman de la Rose」(ばら物語論争)は、双方の登場人物が当代最高の知識人である点で、時代の一面をよくあらわしているものである。⁽³⁰⁾

(30) 賛否両様の十五文書が Ch. F. Ward: The Epistles on the Romance of the Rose and other Documents in the Debate. (Chicago 1911) に公刊されている。それ以外に Gerson の Traicté Maistre Jehan Gerson contre la Romance de la Rose (L'Anglois) 及び Romania, t. 45 (1918) p. 23 に公刊されている。

クリスティーヌの論敵は、フランスの人文主義の最初の芽をつちかつた人々であつた。その第一は、リル Lille の司教聖堂参事会頭であり、皇太子の、そして後にはブルゴーニユ公の秘書をつとめたジャン・ド・モントリユールであり、又宮廷において同職にあつたゴンティエール Contier Col 及びその弟ピエール Col Pierre Col であつた。こうしたまじめな學者——中には聖職に身を置く人もいる——が「ばら物語」の放埒な倫理観を辯護したといへば、奇異の感を与えるであらう。しかし彼等はヒューマニストとして「ばら物語」の自由精神と理性主義を讃美したのであつて、彼等が背德的倫理をたたえたり、彼等自身が女性の敵であつたという意味ではない。ただ「ほとんどふし拝む程に」Paene Colerent 高く評価し、「この本を失わんよりは、むしろシャツなしですまそう」といふ程の彼等の「聖典」が非難、攻撃されるのを黙視できなかったのであらう。

(15) Huizinga. a. a. O. S. 165.

しかし案外に彼等が女性の立場の良き理解者であつたことは、ジャン・ド・モントリユールがゴンティエールにあてた手紙の中で、コルの妻の口を借りて夫に対する不満、歎きを述べさせているのを読むと、クリスティーヌ以上に、恐らくは今日でも通用するであらう、妻の夫に対する正当な要求をこれ程よくいい表わしているものは、中世世界ではほかに見当らないという感じがする。

私は万事につけ、そしていつでも十分にあなたの下に立ち、服従してきたのではないのでしょうか。一年中明けても暮れても私が家を明けるのは聖堂に行く時だけ。それも先ず腰を低くしてあなたのお許しを願つてからでなくては。

それとは逆にあなたは、御自分の正当な權威からして、昼でも夜でも御好きなように家を出たり入ったり。そしてサ

イコロ遊びだの、将棋だのに時を御過しになる。あゝ、良心に背いてもっと悪い事をなさる事がどうかありませんように！……………こうして／＼私達罪のない女達はいつでも男達に罵られてゐる。殿方は、自分達は何をする事も許されてゐる——のりを越えてまでも——と思つてゐる。ところが私達は何をしてもいけないのです。殿方は放埒な淫樂に心を奪われてゐる。そして私達は！もし私達がちょっとでも眼をよそにでも向けようものなら、みだらな女と責められる。私達は妻でも伴侶でもなく、敵の手中にある捕虜の身、購われた奴隸の身の上です。うちでは御主人様は朝は朝御飯を、夕は晚餐を、いくら心をこめて作つても御満足にはならず、夜はすばらしい寝台がととのえられていなければいけないし、いつも着物も肌着も御氣に召す様に丹念に、文句のない状態になくなくてはならない。街の四角の居酒屋か、もっと不名誉な場所（名は申しますまい）で、私達にかみつき、侮辱し、引き裂き、悪口し、そして御自分達が私達に与えもしないものを私達から要求なさる、というようにしまいとすれば。

殿方は他には厳しく、御自分には寛大です。それは正しくない裁きというものです。⁽³²⁾

(32) Defournaux: La vie quotidienne au temps de Jeanne d'Arc (Paris 1951), p. 157f.

これほど女性に理解を持つ学者が「ばら物語」を弁護するのは、いかにも無理で不自然なものがあり、その結果彼等の弁論は、機智はあるけれども、人を確信させる力も、また根拠もないものになっている。しかし頗るまじめな立場からなされたものである事は、モンテリユールが反対の立場にあるある法学者にあてた書簡で、その相手がこの書を非とする事がふしぎでならないし、自分は最後の息の根までこの書を弁護するつもりで、自分と考えを同じくするものも多いといつてゐることからもうかがえる。⁽³³⁾

(33) Huizinga a. a. O. S. 165.

モントリュールは、この女流學者 *filie de l'étude* (クリスティーヌ・ド・ビザン) の博識な関心を、もし彼が十分に評価するのでなかったら、自分は本当の正しい人文主義者とは呼べないものであらう。しかし、彼女が非常に控え目な態度ながら、「ばら物語」にむかって、この作品は月桂冠を与えるよりも、破棄するほうがふさわしいとしたその瞬間に、彼女に対する尊敬の念は消え失せてしまった。それはどうもひどすぎるという。⁽³⁴⁾

ゴンティエリコもクリスティーヌに対して、「真のカトリック教徒、優れた神學者、深遠な哲學者、すべての人間の智識を我がものとし、その名は永遠に伝えられるであらう人」ジャン・ド・マンをこきおろしたと、激しい言葉で非難している。⁽³⁵⁾

(34) Cartellieri: a. a. O. S. 111

(35) Cartellieri: a. a. O. S. 112

クリスティーヌ・ド・ビザンにとっては、この論争における彼女の支持者として、当代最高の教会政治家、神學者、説教者、十五世紀の代表的人物の一人であるジャン・ジェルソン *Jean Gerson* その人を得た事は、何という幸福であつた事か。彼とモントリュール及びコル兄弟の間に交された論争は、最初は静かなものであつたらしいが、次第に激しい口調の論文がつぎつぎと相手にたたきつけられるようになった。これ等の論文は失われたものも多いが、現存するもののうち最も優れた、力強い論旨で貫かれたものは、ジェルソンの筆になる *Vision Allégorique* (寓意的幻想) という表題を持つものである。⁽³⁶⁾

(36) 註 (30) 参照。

これは一四〇二年五月十八日夜の日附をもつもので、敵の武器、即ちあの寓意文学の形式で——「ばら物語」と同じく

——書かれている。とある朝彼ジェルソンが眼覚めると種々様々な思想の筆や翼にのって彼の心が一個所から他所へと飛び歩き、遂にキリスト教の聖なる庭 la court sainte de crestiente に達したのを感じる。そこで彼は「正義」Justice と「良心」Conscience と「智慧」Sapience とに出会う。「貞潔」Chasteté が「愛の狂気」Fol Amoureux (シヤンド「マン」が地上の世界から自分も弟子達も追出したと告訴するのを聞く。「貞潔」の「よき護衛者」bonnes gardes とは、「ばら物語」の中で悪役であった「羞恥」Honte「恐怖」Peul 及び「自制」Dangier で、卑しい接吻も淫らな視線も誘惑的な微笑も怪々しいはなしさえも、敢て許したり、見逃してやったりする事のない門番である。「貞潔」は「愛の狂気」に向って、

いたる所に火薬や硫黄の火よりもっと烈しく、もっと悪臭を放つ火を投げつける。

と非難し、また呪わしい老婆をして、

すべての若い娘がどんなにして自分の身体を羞恥も恐怖もなく、素早く値よく売るべきかを、そしてだましたり、偽った誓いを立てることを何とも思わなくなることを

教えしめると激しい言葉で責め、

結婚も修院生活も嘲笑し、肉欲の世界にすべての想像をはせ、又最も悪い事には「ヴィーナス」や「自然」や「理性」の口を通じて、天国の概念やキリスト教の秘儀を官能快楽の世界と混同せしめる。

と難する。

(37) Dangier の意義の解釈については Huizinga: a. a. O. S. 497. 註(1)

(38) Huizinga: a. a. O. S. 166f.

ジュールソンの非難の最後の点は実に正鵠を得ている。「ばら物語」の危険な点は正にそれであり、感覚陶醉の世界をもって宗教法悦の境地とすりかえ、肉体行為をもって宗教秘儀になぞらえる。ピエール・コルの如きは、官能讚美の爲にパウロ書簡もルカ福音書を引用する——あたかも神秘家が自己の宗教体験を語る時の如くに——ことを恥じないのである。⁽³⁹⁾

(39) Ward, a. a. O. No. 9 書簡。

この詩を読む事によって滅びに至る靈魂の価値は、これに歸せらるべき文学価値より計り知られないほど大きいと、余が手中に「ばら物語」の一部あり、世にはこの一部よりほかにはあることなく、こは千金の価ありと知らんとも、尚かつかくの如きを一般に売らんより、むしろ火に投ぜん。……人もしこの書のうちには多くの良きものありといわんか、余はそのうちにある悪しきものの故に破棄すべしと要求すべきに非ずや。火はより危きもの、釣針はえさもて隠され、見えざる時に魚にとり害となるなり。剣はたとえ蜜がしたたらんとも、切ること鈍きことあらんや。……悪しき会話は良俗を乱すとは、余のみならず聖パウロ、セネカ、及び経験の教うる所にして、その言を信すべきなり。⁽⁴⁰⁾

と極めて激しい言葉を用いている。

(40) James Connolly; John Gerson Reformer and Mystic (Louvain 1928), p. 125f.

「ばら物語論争」の最も興味ある点は、両陣営ともにフランスの最初のヒューマニストたちから構成されていたことである。クリスティーナ・ドリビザンはイタリヤの人文主義をフランスに普及せしめた功勞者の一人であり、ジュールソンもまた古代の文芸に通暁した一流のヒューマニストであつたことは、彼の名文、名説教の至る所に窺われる。その素養なくして

ては、この論争における彼の敵の心臓を射貫くような鋭い論難はあり得なかったのではなからうか。ジェルソン自身もまた、敵の立っている地盤たる古代異教の世界の本質を本当に知っていたのである。モントリュール、コル兄弟及び彼等の周囲のヒューマニスト達の古代への傾倒はいわずもがなの事である。敵味方の相違は、キリスト教的ヒューマニズムか、異教的ヒューマニズムかの相違にはかならなかったのである。

モントリュールもゴンティエールも内乱の中に殺され、引續く百年戦争によって、かくも早くフランスの地にめばえた人文主義はその芽を踏みにじられて順調な成長を見ず、約百年を経て始めて花咲かす事ができたのであった。

ジェルソンの雄弁も、クリスティーヌの謙虚な品格ある訴えも、決して時代の「ばら物語」に対する趣味、愛好を打破することはできなかった。しかしながら不当な侮辱に黙することなく、堂々と女性の立場を主張し、醜きもの、卑しきものを退けて、美しきもの、とうときものを守る正義の声を聞くことは、まことに心よき事である。

宮廷の世界にもクリスティーヌ・ド・ビザンの支持者は少くなかった。その一人、元帥ブーシコー Jean II. le Meingre de Boucicaut は彼女の保護者であり、彼女が騎士の鑑として、「愛のためには全く勇敢で、寛大、剛毅であった」と讃嘆してやまない人であった。彼は当代の騎士の代表的人物であった。武勳赫々たる勇将、十字軍の歴戦のつわもの、敬虔の心深く、日に二回ミサを拝聴し、金曜日には黒の喪服をまとい、日曜には徒歩で巡礼し、婦人に対しては礼儀正しく、すべての意味で高いキリスト教的徳の所有者であった。彼の逸話として伝えられる所によれば、イタリアのジェノヴァ Genova の街上でこのフランス国王の太守に挨拶した二人の婦人に、彼はうやうやしく鄭重に礼をした。それが遊び女であると注意された時、彼は富んだ一人の婦人によりも、十人の遊び女に敬意を払った方が余程嬉しいと答えたという。

しかし彼のなす所、すべてどこか本質的なものが抜け、遊戯的な点があった。これは彼がふまじめであつたというのではない。それは時代なのである。クリスティーヌ自身ですら平然と

Se souvent vais ou moustier,

C'est tout pour veoir la belle

Fresche com rose nouvelle.

私が修道院によく通うのは、

新しいばらのように生き生きした

あの美人を見る為、ただその為。⁽⁴⁰⁾

と唱う時代なのである。彼の行動の形式的な所、遊戯的な面は、精神を失つて形式のみ残つた中世騎士道そのものの姿であり、時代の子たる彼にあつては戦闘はスポーツに、信仰生活は演劇に類するものがあつた。彼が十二名の他の騎士と協力して、逆境にある婦人、特に夫を失つた婦人の保護を目的とする騎士修道会 *Ordre de l'écu verd à la Dame blanche* (白衣の貴女を画いた緑の楯を持つ修道会) を設立したのは、クリスティーヌ・ド・ビザンの言葉に促されてのことであつたろう。

(40) *Christine de Pisan: Oeuvres poétiques, I, p. 172.*

しかしこの風変わりな騎士修道会も、もっと華々しくも派手な社交団体の出現の前には、全くその光を失つた。あの御祭り騒ぎの好きなブルゴーニュの宮廷社会が、こんなすばらしい機会を見逃す筈もなかった。「ばら物語論争」が高潮した一四〇一年示顕節のころ、ブルゴーニュのフィリップ豪胆公 *Philippe le Harbi* はブルボン公ルイ *Louis de Bourbon*

と共同して国王シャルル六世 Charles VI に、当時バリ市民を脅かしていた黒死病の流行の不愉快な時期の「一部をより優雅に過し、新たな喜びを呼びさす目的で」、「愛の宮廷」Cour d'Amour を開くことの許可を求めた。まさにボッカチオのデカメローネ Decamerone の情景そのままである。この「愛の宮廷」の設立趣意は、謙譲と誠実の徳に基づいて、「すべての夫人及びおとめを敬い、たたえ、これに仕えん為」*à l'honneur, loenge et recommandacion et service de toute dames et damoiselles* というふれこみであり、国王、ブルゴーニュ公、ブルボン公を保護者として、王侯、貴族、高位聖職者のみならず、市民階級も下級聖職者も加わるもの多く、あらゆる階級が代表されているといつてよかった。この会の存在について記す所のあるこの後の十五年間に挙げられている会員の名の総数は七百名以上にのぼる。この「愛の宮廷」の君主に選ばれたものが高貴な出身でないのは、恋愛には階級のへだたりのない事を示す為であったのであろうか。会員達はこの宮廷のそれぞれの御役目を仰せつかつて、すばらしい称号で飾られたのであった。一四〇一年二月十四日、聖ヴァレンティンの祝日に、「愛の宮廷」の「君主」はバリーに最初の祝宴を開いた。「臣下」はすべてこれに馳せ参じ、恋愛詩を呈出しなければならなかった。これは読み上げられ、御婦人達の批評に委ねられた。更に「恋愛法廷」が開かれて、愛に関する論議が戦わされた。これにも厳しい規則があって、双方からそれぞれ十二のテーゼを十二行に書き記して差出さねばならず、インキの色さえ規定されていた。授賞はすべて婦人の手によってなされた。

会員はすべて女性の名誉を傷つける如き詩を作ったり、そうした言辭を弄する事は禁じられた。その他に無数の煩雑な会規があり、毎年五月及び聖母の五つの祝日のうちのどれか一つに祝宴を開き、又「愛の君主」は毎年五月トーナメントを開く事ができ、「臣下」の要求があった時は、必ずこれを開く義務があった。

これは十八世紀の「文学サロン」にも比すべきものであったのであろう。ギユベールユード=メッツ Guilbert de Metz

は当時のパリの案内記に、パリ名物として「愛の宮廷」をあげ、「愛の君主」は音楽家や詩人を抱えていて、彼等はシャノンソン Chansons もバラード ballades もロンドー rondeaux もウィルレイ virelais もその他の恋愛詩も、どんな形式にでも作詩し、歌い、楽器をそれにつけてかなでることができ⁽⁴¹⁾る」と記している。

(41) Defourneaux: a. a. O. p. 141.

さて、我々を最も驚かすのは、この会員名簿の中にモントリュール及びコル兄弟の名前を見出すことである。彼等はその矛盾を感じなかったのか。それは当時の流行に遅れまいとする単なる虚栄心か。もしくは、すべては「ばら物語論争」が次第に激しく、醜い形をとってくることにについて、そのほこさきを鈍らせようとする政略家ブルゴーニュ公のたくらんだ仕業であったのか。結局すべてが、クリステイヌ・ド・ピザンのまじめな努力を御祭騒ぎの種にした、事あれかしの宮廷社会の遊戯以上のものではなかったのであろう。女性を尚ぶ事を目的としたこの会の会員の中で、婦人誘惑者のいまわしい名を受けたものが、一・二にとどまらなかったことから、理想と現実の喰い違いのはなはだしさを感じさせる。女性奉仕の美しい形式も、所詮は社交界の一つの遊戯たる以外には、何等の内容を持ち得る様な時代ではなかったのであろう。

「愛の宮廷」はもっともパリだけのものではなかった。これに類似した「愛の泉」 Puits d'Amour はあまたの都市、特にブルゴーニュ公領内のアシアン Amiens トゥールネイ Tournai 等に見られ、その他また諸侯の宮廷ではしばしば恋愛論議が戦わされた。「武事と恋愛について適度に礼儀正しく語るを得るものは、話しかけ、返答を与え得る相手を見出すのが確かであった。」⁽⁴²⁾と記されている。

(42) Le Victorial, éd. Puymaigre. p. 323 (Defourneaux: a. a. O. p. 144).

クリスティーヌ・ド・ピザンの「ばら物語」に対する勇敢な挑戦、抗議は確かに大きな波紋を投げ、その波紋は池一ぱいにまで拡がって行った。その恋愛論議は時代の趣味に合致するものがあつたのであろう。ちょうど彼女の「羊飼いの言葉」Le dit de la pastouseなる詩の田園生活の描写が世の趣味に投じて、そこに新しい詩のジャンルが生れ、田園、牧童趣味が世を風靡したのとよく似たものがある。しかし恋愛論議の流行は、彼女の意図したものでも、欲した所でもなかった。彼女の要求した所は、女性をあげ、その足もとにひざまづくことではなく、偏見なく婦人を評価し、その価値をとうとぶ事であつた。そしてその点では彼女のかちとつたものは少なかったであらう。彼女の言葉をまじめに受取るには時代は余りにも遊戯的精神にみたされていたのであつた。

クリスティーヌの文筆活動は主として一三九九年から一四一五年ごろまでに及んでいる。子供を養育する母としての義務を果たした彼女は、一四一四年（一四一八年とも称する）に一修道院に入った。修道院生活の中から筆をとることは稀である。一四二九年には彼女は最後の詩をジャンヌ・ダルクをたたえて、これにささげたが、クリスティーヌの死はこれから程遠くない時期のことであつたようである。

彼女ほど飽くまでも女性的な詩人は、いつの時代にあつても稀にしか見出されないものである。彼女といえども時代の子であり、才氣ばしつた空虚な遊戯的なものが彼女の詩に全然見当らないというのではない。しかしその底には常にいかにも女らしい深い愛情がひそむのが感じられる。まことに軽やかに歌い出される詩は、動きは少なく、滑らかに淡彩画を見る如く、素直な、暖い女の心の歌である。

Quant chacun s'en revient de l'ost

Pour quoy demeurés tu derriere ?

Et si scez que m'amour entiere
T'ay baillée en garde et depost.

誰しもが東方（十字軍）から帰ってくる時に、なぜあなただけあちらにお残りになるのです。しかもあなたは私が、愛情のすべてを、あなたを御守りし、御助けするように差上げたのを御存知⁽⁴³⁾のに。

(43) Christine de Pisan: Oeuvres poétiques, I. p. 275. No. 5.

深い愛情と軽い怨みの交り合った溜息を聞くような気がする。

Mon ami, ne plourez plus !

Car tant me faites pitié

Que mon cuer se rent conclus

A vostre douce amistié

Reprenez autre maniere;

Pour Dieu, plus ne vous doulez,

Et me faites bonne chiere,

Je vueil quanque vous voulez.

我が友よ、御泣きなさるな、これ以上。私の心に憐れみの情を起させて、私の心をあなたの優しい愛情に捧げてしまします。ほかの風をなさって下さいませ。悲しむことだけはどうぞもう。私に嬉しい御顔を御見せ下さいませ。あなたの御好きなように何なりといたしますから。

男の涙の前での女心の弱さをちらりと、何のいやみもなく歌いのけている。

Il a au jour d'ui un mois

Que mon ami s'en ala.

Mon cuer remaint morne et cois

Il a au jour d'ui un mois.

'A Dieu, me dit, je mén vois',

Ne puis a moy parla,

Il a au jour d'ui un mois.

あの方がいっとおしまいになってから、今日でひと月になりました。

私の心は暗くてたまる。

今日でひと月になりました

さようなら、でかけていくよとおっしゃって、それから私に何もおっしゃらない。今日でひと月になりました。⁽⁴⁴⁾

(44) Oeuvres poétiques, I, p. 146, No. 30.

彼女の詩にはいつも何か軽い憂愁の影があるのも魅力である。怨まず、叫ばず、悟った心と深い愛情をもってすべてを耐え忍んでいく女心。その女心の詩人という名に、クリスティヌドリビザンほどふさわしいものは稀であつたろう。